

ヨハン・ホイジンガの近代文明批評のルーツに関する一考察

杉浦 森（愛知教育大学）

1. 発表の趣旨

オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga 1872-1945）は1930年代に入ると近代社会を痛烈に批判するようになった。それはヨーロッパ社会が近代化の波の中で、その影の部分をクリックアップしてきたからである。ホイジンガの批判はナチズムの台頭を契機として、近代文明、さらには近代合理主義一般にまで及ぶ。その鋭い指摘は『朝の影のなかに』を始め、いくつかの著書に見ることができる。

歴史の記述的研究家であったホイジンガが、1930年代に入り、近代文明批評家として変貌を遂げていったのはなぜか。本研究はこの課題を明らかにすることを目的とする。

興味深いことに、ホイジンガは近代文明批評を行う数年前にアメリカを旅行している。その時に書いた日記には実に多くのアメリカに対する印象が記されている。ホイジンガはアメリカの何を見て、そこから何を感じ取ったのだろうか。果たしてホイジンガの近代文明批評と何らかの因果関係があるのか、本論で考察を試みたい。

2. 研究の方法

ホイジンガの近代文明批評のルーツを明らかにするには、まず、ホイジンガの近代文明に対する見解をまとめなければならない。次に、その見解が著された時期以前のホイジンガの言動を調べ、同じような指摘をしている箇所を探す。このプロセスをたどるには、ホイジンガが残した何らかの記述を頼りにするため、著書、日記、メモ書きなどを資料とする文献研究の方法をとる。

3. ホイジンガの近代社会観

ホイジンガはヨーロッパ社会の近代化に対して様々な批判を行っているが、それらは大きく二つにまとめることができる。

19世紀以降、経済的価値・物質的価値の追求が社会を支配するようになり、文化的価値・精神的価値の重要性が軽視されるようになったことに対する批判。

大衆社会の到来によって均質化した受け身の態度をもった人間が増えたことによる文化の画一化についての批判。

4. ホイジンガの近代アメリカ観

ホイジンガは1926年に初めてアメリカを訪れた。二ヶ月ほどの旅行であったが、東海岸から西海岸までアメリカを横断し、見聞したことを日記に書き留めている。

(1) アメリカの新聞について

ホイジンガはアメリカの新聞がおもしろおかしく書かれていることにまず興味を持った。しかし、デトロイトニュース新聞社を訪問したときの印象は、多くの資源、人間の能力が無駄に使われていることであった。創意に満ちた多くの人間が、莫大な原材料、労働力を浪費して、結局、興味本位の質の低い新聞しか出版していないことにホイジンガはショックを受けた。大衆の興味を引いて販売部数を増やせばよいといった利益優先の考え方が、

結果的に量の悪をはびこらせているとの印象をもった。

(2) 映画について

映画は高いレベルの人から低いレベルの人にまで同じ考え、同じ見方を提供する。これは民主主義という名の思考の画一化であると、ホイジンガは批判している。

また、巨額の制作費をかけている割には内容が貧困・単調であり、営利ばかりを追求している。さらに、映画は人々に低俗な思考を機械的にばらまくから、ついにはこの思考を極めて大きな重みをもった文化的規範の地位まで高めてしまうとホイジンガは述べている。

(3) 国民教育について

近代化の重要な要因の一つとして公教育の普及と教育の民主化が挙げられるが、ホイジンガはこのポジティブな側面を評価することよりも、むしろネガティブな面を主張している。一般教育の普及によって平均的な知識の量は各人多くなったが、断片化し、似通った知識をもつに留まる大衆は、深い精神性に根ざした熟慮・判断・創造性といったものを失った。その原因をつくる一例が、人間の神秘性をも消してしまうアメリカの大衆向け博物館教育であるとホイジンガは考えた。大衆一般に文化と接する機会を与えることはよいことであるが、それが浅薄な文化の理解と文化の商品化をつくり出してしまふ危険性をホイジンガは危惧していた。

(4) アメリカの浪費社会について

生活の豊かさをモノに求め、大量生産・大量消費を進めたアメリカは、結果的に多くの無駄をつくり出し、目にあまる資源の無駄遣いと浪費社会をつくった。繁栄の時代、「新時代」と言われた時期にアメリカを旅行したホイジンガには、この国は単なる浪費の社会と映ったのであった。

5. 考察

ホイジンガはアメリカ文化を、量が多いが質の伴わない文化、人々の心を安易に引きつける興味本位の文化、精神性の深さよりも表面的な理解を重視する文化と捉えている。

近代化の特性としての「平等」意識が、アメリカでは「皆と同じでありたい」という消極的な方向に働き、本来「平等性」と混同してはならない「均質化」を招くことになった。周りの人と同じ生活をしたいという人々の願望は、大量生産・大量販売のシステムを強固なものとし、社会生活の均質化を生むと同時に、経済的価値・物質的価値の追求に拍車をかけた。その結果として浪費社会ができたというのがホイジンガの認識であった。

ホイジンガのアメリカに対する以上の認識は、3.で述べたホイジンガの近代社会観とかなりの点で一致していることがわかる。また、ホイジンガの近代文明に関する批判的見解が、彼のアメリカ旅行日記とアメリカに関する評論以前には見られないことを加味し、次の結論を導き出すことが可能であると考えた。

ホイジンガの近代文明批評は、その起源を彼のアメリカ旅行とアメリカ研究に求めることができる。ホイジンガはヨーロッパに先駆けて、当時のアメリカを世界的な近代産業化の流れの中の最たるものとして捉えていた。そして、近代産業社会の波がヨーロッパをも巻き込み、物質主義社会と文化の画一化がヨーロッパ社会でも起こることは免れないことを予期し、アメリカ社会を念頭に置いて近代産業社会のネガティブな側面を、後半生をかけて批判的に記述していったのである。